

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：35307

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520088

研究課題名(和文) 西村茂樹における洋学の基礎的研究

研究課題名(英文) Basic study of Western learning of NISHIMURA Shigeki

研究代表者

高橋 文博 (TAKAHASHI, Fumihiro)

就実大学・教育学部・教授

研究者番号：70116474

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：西村茂樹が、英語原書から翻訳した手書き原稿で、『増補改訂 西村茂樹全集』に収録されなかったもののうち42点を翻刻して、電子データ化した。翻刻した資料42点のうち、原書と著者を調査し、37点については確認できた。明治前半期になされた洋学の実態を翻訳資料に即して明らかにする上で重要な意義がある。翻刻した資料は紙媒体として冊子体とするとともに、PDFとしてインターネット上で公開している。
なお、西村における洋学が日本道徳の提唱と平行していることも指摘した。

研究成果の概要(英文)：This study intended for documents of handwritten manuscripts which NISHIMURA Shigeki translated from English books and were not recorded in the complete works of supplementary revision of NISHIMURA Shigeki. I reprinted the 42 documents and made electronic data, and found the original and authors about 37 documents. This result has important significance in clarifying the actual situation of the Western learning in the first half of the year of the Meiji era. I distributed the reprinted documents as a booklet of paper medium, and show it on the internet as PDF. In addition, I pointed out that Western learning in Nishimura was parallel to a proposal of Japanese morality in a article..

研究分野：日本倫理思想史

キーワード：西村茂樹 洋学 翻刻 手書き原稿 翻訳

1. 研究開始当初の背景

西村茂樹(1828-1902)は、明治期の啓蒙的知識人であり、文部官僚として活動した後、道徳教育の振興に尽くした。近代日本の形成期において教育、思想の面で極めて大きな役割を果たした。その学問的見地からの評価は、保守派とする傾向が強いが、それは一面的なものである。この傾向は、多分に、第二次大戦後の日本の思想風土にもとづく面があるとともに、他面で、西村の言説や行動についての資料が不足していたことにもよっていた。

こうした事情は、2004年-2014年に刊行完結した『増補改訂 西村茂樹全集』全12巻の登場によって大きく変化しつつあると思われる。この『全集』には、五つの巻にオランダ語、英語原書からの翻訳が含まれている。このことは、西村における西洋研究が、幕末以後、極めて精力的になされていることを示している。これらは、一部は公刊されたものの、多くは手書き稿本として残され国立国会図書館に所蔵するが、容易に接近しえない状態であった。

わたくし自身、この『全集』刊行に、第三巻以後、編集委員として参画し、西村における英語原書からの翻訳手書き稿本の翻刻に携わり、原書探索をした。その中で、幕末から明治期にいたる洋学の実態を部分的に知ることになった。また、このたびの『全集』に収録されていない多くの翻訳の手書き稿本のあることも確認した。

こうして、『全集』未収録の西村による翻訳稿本を、翻訳原書を調査確認するとともに、翻刻して電子データ化して公開することが、新たな課題となった。このことにより、明治初年以後の、日本における近代化の中で進められた、西洋研究の実態が明らかとなると考えたのである。

2. 研究の目的

研究の目的は、『増補改訂 西村茂樹全集』に収録されなかった西村茂樹による英語原書からの翻訳手書き稿本を調査検討することである。

西村の西洋書翻訳は、道徳学、哲学、論理学、歴史学、政治学、経済学、地理学、社会学、心理学、生理学、物理学、天文学など広範な学問分野にわたっている。翻訳稿本は、『全集』に収録されなかったものでも、50件以上は存在しているが、そのほとんどは、英語原書からの翻訳である。

これらの翻訳の原書、著者、原書の内容、刊行年をそれぞれ明らかにする。西村の西洋書翻訳は、完訳でなく、ほとんどが部分訳であり、とくに全集未収録のものは部分訳、あるいは断片とでもいえるものである。これらは手書き稿本として残されているので、これらを翻刻する。

西村の翻訳原書を手し、翻訳された部分と翻訳されなかった部分を確認し、そのことのもつ意味を検討する。

これらは、『全集』に収録されている西洋書翻訳と合わせて分析する必要がある。

西村の翻訳した西洋書は、多くの学問分野にわたるが、それぞれの書物の学問的意義を著者の確認とあわせて行う。

3. 研究の方法

まず、西村茂樹の翻訳手書き稿本を手することから始めた。

これらはすべて、国立国会図書館が所蔵しており、一部を除いて、ほとんどが電子化されている。電子化されているもののうち、一部は国立国会図書館内でのみ閲覧可能となっている。館内でのみ閲覧可能なものは、国立国会図書館に向いて閲覧の上、必要な資料について複写依頼して紙媒体を手した。

資料の大半は、館外からインターネットのウェブサイトにより閲覧が可能であるとともに、ダウンロード可能であるから、ダウンロードして紙媒体とした。

紙媒体とした手書き稿本を翻刻した。翻刻は、一部は、自ら実行したが、大半は大学院生及び業者に委託して、第一次の翻刻をしてもらい、最終的にわたくしが点検完成した。

次いで、並行して、翻訳原書の調査を行った。翻刻対象とした資料はすべて英語原書からの翻訳である。調査の手がかりは、資料の題名、著者名であるが、ほとんどが漢字表記であり、仮名もわずかにありはするものの、そこから原語のスペルの確定は困難であった。とりわけ、書名以外に手がかりのない場合は困難を極めた。

原書調査は、イギリス、アメリカの図書館の検索システムによった。

翻訳原書の探索のために使用した、主な図書館の検索システムは、次のものである。

- ・国立国会図書館蔵書検索システム
- ・ミシガン大学 : Mirlyn Classics
- ・Explorer British Library
- ・オックスフォード大学 : SO10
- ・ハーバード大学 : HOLLIS
- ・コロンビア大学 : CLIO legacy

もっとも頻繁使用したのはミシガン大学の Mirlyn Classics である。これは、『増補改訂 西村茂樹全集』編集に際しての翻刻においても大いに活用した経験があった。

原書の書名を推定した後、原書と推定した書物を探索した。非常に好都合なことに、原書はインターネット上に電子書籍として公開されているものが多かった。多くは、十九世紀の出版時のものをそのまま電子書籍として無料で公開していた。電子書籍がなく、新規に購入することは稀であった。

西村翻訳と照合することにより、西村が翻訳した箇所を確定した。翻訳は部分訳であるだけでなく、省略もあるから、照合を慎重にする必要があった。また、翻訳原書には、初

版以後、重版していたり、重版時に改訂しているものがある。また、重版に際し、分冊している場合もある。西村翻訳の原書の出版年・版の確定も合わせ行った。

4. 研究成果

(1) 概要

『増補改訂 西村茂樹全集』に収録されなかった、西村茂樹が英語原書から翻訳した手書き稿本資料のうち41件を翻刻し、電子データ化して、解題とともにインターネット上に公開し、紙媒体としても製本して、研究者に頒布した。別記した通り、『西村茂樹における洋学の基礎的研究』として研究成果報告書として公開した。

翻刻した41件の資料は、断片的なものから大部のものまで、分量的にも多様である。翻刻資料の選定は、内容には着目せず、国立国会図書館から入手し得る資料のうち判読可能性の高いものにほぼ限定した。ある程度まとまった資料について翻刻を進めながらも、判読不能な文字が非常に多いため、最終的に公開を断念したものもある。

翻刻した分量は、紙媒体にして、A4版で1頁2段組み、735頁である。解題は1件につき平均1頁弱であるから、翻刻した正味はおおよそ700頁である。

41件の資料のうち、4件については、翻訳原書を確認できなかった。そのうち、2件、すなわち「西國道學纂論 上」「致知學即洛日克 百科新編」については、よく整理された大部のものであるだけに、遂にその原書を確認できなかったことは、ことに遺憾である。

また、西村による英語原書からの翻訳の仕方を通して、彼の思想の性格を分析することもできなかった。これは、『全集』における翻訳も含めた膨大な資料の検討を必要とすることもあり、時間的制約の上からも、断念せざるを得なかった。

したがって、このたびの研究の成果は、基本的には、翻訳手書き稿本を翻刻したこと、翻訳原書の確定をしたことである。

だが、このたびの翻訳資料の翻刻を、『増補改訂 西村茂樹全集』収録の翻訳資料の翻刻と対比すると、いくつかの特徴を指摘することができる。この特徴を、次にまとめて指摘することとする。

(2) 論理学

このたびの翻刻が、『増補改訂 西村茂樹全集』におけるそれと比較して、最も注目すべきことは、論理学関係の翻訳を翻刻したことである。『全集』には、論理学関係の翻刻は1件も含まれていない。

本研究では、論理学関係の翻訳資料として7件、依拠した原書としては5件を翻刻した。このうち、Alexander Bain (1818-1903) の *Logic: Deductive and Inductive* 及び Henry Coppée の *Elements of logic* については、西村とは別人による部分訳が出版されている

が、William Dexter Willson の *An elementary treatise on logic* 及び William Stebbing の *Analysis of Mill's System of Logic* については、西村以外の翻訳者はいないようである。「致知學即洛日克 百科新編」については、先にも述べたように、原書を確認できていないので、何もいうことはできない。

だが、これらの事実から、西村に論理学への強い関心があったことをうかがい知ることができる。

Logic の訳語が、演知學、致知學、洛日克と不安定であることも興味深い。洛日克は Logic の音の漢字表記を日本語としての学問名としたものである。西村が、論理学という名称を用いるのは1890 (明治23) 年に至ってのことである(『読書次第』)。その1890年の時点でも、彼は、学問の名称として洛日克の語を用いている。

このことは、論理学が日本の伝統的思考法とは異なる新しい思考法を教える学問であったことによる。論理学は、明治初年から人文学、社会科学、自然科学の多様な学問分野において熱心に学ばれたのであり、西村もその流れの中にいたのである。

(2) 骨相学

論理学だけでなく、西村が、骨相学関係の翻訳をしていることに注目する必要がある。

骨相学 Phrenology は、十九世紀の欧米で非常に隆盛した学問である。ドイツ人のフランツ・ガール (1758-1828) によって提唱された学説に骨相学という名称を与えて発展させたのはドイツ人ガスパール・シュプルツハイム (1776-1832) であったが、ジョージ・コームはその代表的唱道者であった。骨相学は、道徳哲学、教育学、心理学、脳科学の歴史において重要な意義をもっているし、その影響は西洋の日常生活にも存在しているという (平野亮『骨相学』世織書房、2015)。

西村は、シュプルツハイムの著述 *Philosophical Catechism on the natural law of man* を「理學問答」という名称で部分訳しており、これは『全集』に収録された。このたび翻刻した「道徳理學」は、ジョージ・コームの著述 *Moral philosophy, or, The duties of man considered in his individual, social, and domestic capacities* の部分訳である。

骨相学は、日本ではその名称さえほとんど忘れられているが、十九世紀後半から二十世紀前期には注目されて、翻訳もいくつかなされていた。西村の翻訳は、日本における骨相学受容の一環をなすものである。

(3) 宇宙哲学

西村は、アメリカの John Fiske (1842-1901) の著述 *Outlines of Cosmic*

*Philosophy based on the doctrine of evolution, with criticisms on the positive philosophy*の初めの部分を、「宇宙理學前輯」「宇宙哲學」として異なる標題のもとに、二度にわたり翻訳している。西村は、*Philosophy*の訳語に、はじめは理学をあて、のちに哲学をあてており、同一の原書に対する、時期を異にする翻訳が二件あるわけである。同一の原書を二度にわたって翻訳していること自体に、西村の関心の深さをうかがえるとともに、時期の違いによる翻訳の仕方の相違をうかがうことのできる資料である。

フィスクの学説は、進化論とキリスト教の調停を試みる *Cosmic Philosophies* というアメリカの哲学潮流の中にあつた。それは、新たな自然科学的知識に対する哲学の応答という時代精神を示すものである。

フィスクの著述は、西村の依拠した原書とは別のものが、翻訳されて出版されている。骨相学と同様、今日では忘れられているが、当時は一定の注目を受けていた学説であつた。

(4) Alexander Bain (1818-1903)

明治期の日本で翻訳書が多く出された人物にスコットランド人のアレクサンダー・ペインがいる。ペインは、心理学、道徳哲学、論理学、言語学、教育学などにおいて業績を挙げしており、影響力の大きかった人物である。彼は、John Stuart Millと親交があり、その伝記と父 James Millの伝記も著している。

ところで、『全集』に収録されている資料にはペインの著述からの翻訳は含まれていない。このたびの翻訳では、*Mental and Moral Science. A Compendium of Psychology and Ethics.* 及び *Logic: Deductive and Inductive* からの部分訳を3件収録した。後者については、先に論理学に関して触れたが、前者は「道徳學」「心學及道學」として翻訳されている。

生物学的知識と多分に結び付いたペインにおける心理学、それと並行して構成された道徳哲学は、当時の欧米の傾向でもあるが、西村における道徳にかんする思想形成に大きく作用しているとみられる。

(5) Henry Day (1808-1890)

さらに興味を引くことは、断片的ながらヘンリー・デイの著述 *The Science of Ethics: An Elementary System of Theoretical and Practical Morality* を4件も翻訳していることである。

このことの意味を簡単に述べることはできない。ただ、デイの書物が道徳哲学ないし倫理学を「職分」「義務」*duty*の学と定義しているところに注目したい。そして、さらに注意したいのは、西村が最も多くの翻訳を残している部分が、国家の義務を論

じている部分であることである。

デイの書物からの西村の翻訳として、個人の義務、国家に対する国民の義務、そして国家自体の義務について論ずる箇所が残されている。

このことは、西村における道徳が権利としての側面以上に義務としての側面に焦点を当てられるものであつたことを示唆している。

(6) 小括

終わりに、このたび翻刻した西村の翻訳のあり方を通して、彼における西洋研究の性格を考えることとする。

西村の翻訳は、道徳哲学を中心に、論理学、哲学、心理学、政治学、経済学、社会学と広い学問分野に及んでいる。だが、西村の翻訳は、大抵、Introductionから始めて、途中で途絶している。

これは、稿本が散逸したために、部分的に残存したという、西村の関与しない事情にもよる。だが、メモ書きの形を含む部分訳が大量に存在していることを、それだけでは説明できない。

西村は、英米で出版された諸学問の著述を熱心に翻訳したが、個々の著述の全訳を目指さなかったし、また、翻訳の公表ずしも目指してもいなかったのである。

このことは、次のことを意味している。西村は、西洋近代の学問の総体としての特質を把握し、その新しい諸学問の傾向や思考方法を身につけようとしていたのである。そのために、個々の著述の全体を翻訳することよりも、Introductionを中心に部分訳して内容理解をすることで、個々の著述や諸学問の要点を把握しようとしたのである。

それに加えて、西村の部分訳が稿本として大量に残されていることは、公表を必ずしも意図していないことを意味している。それは、彼が自らの学びとして翻訳を続けたということである。これらの稿本の存在は、儒教や蘭学という古い学問から自らを西洋近代の新しい学問精神を獲得しようとする態度、すなわち自らを啓蒙する態度を証示している。

西村は、明治期の啓蒙思想家と性格づけられることがあり、むしろ、それは正しい。しかし、彼における啓蒙は、自らを啓蒙するという自己変革にもとづくことであつた。

近代日本の形成とは、日本の人々が、西洋近代と出会い、その学問を全面的に受容しつつ、自らの精神の自己変革をなしとげようとする態度に支えられていた。西村茂樹の残した翻訳手書き稿本は、そうした自己変革の様相を、一つの典型として示しているのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

高橋文博、東アジアにおける生と死の世界 浅見綱斎における生と死の思想、韓国人と日本人の生と死、査読無、大韓民国・景仁文化社、2015、3-33 (ハングル) 35-63 (日本語)

高橋文博、近代日本の思想を考える、日本思想史研究会会報、第 31 号、査読有、日本思想史研究会刊、2015、1-9

高橋文博、近代日本における倫理思想の特質、東方からの光: 日本文化と我々、査読有、セルビア・ペオグラード大学文学学部刊、2014、5-13、セルビア語

高橋文博、理想主義者としての西村茂樹、弘道、査読無、第 1089 号、日本弘道会刊、2014、11-16

高橋文博、現世を生きるー近世的死生観の傾向、岩波講座日本の思想、査読有、第五巻、岩波書店刊、2013、233-263

高橋文博、『増補改訂 西村茂樹全集』とわたくしの課題、弘道、査読有、第 1085 号、日本弘道会、2013、pp.20-21

高橋文博、「明治時代の道徳」を読む、弘道、査読無、第 1079 号、日本弘道会刊、2012、pp.20-21

〔学会発表〕(計 2 件)

高橋文博、武士の思想をめぐって、日中若手研究者交流セミナー、岡山大学文学部、2015 年 3 月 14 日

高橋文博、東アジアにおける生と死の世界 浅見綱斎における生と死の思想、韓日文化交流基金国際シンポジウム、大韓民国汝矣島レキシントンホテル、2014 年 10 月 24 日

〔図書〕(計 2 件)

高橋文博、西村茂樹における洋学の基礎的研究、就実大学教育学部刊、2015 年 3 月、全 747 頁

高橋文博、近代日本の倫理思想 主従道徳と国家、思文閣出版刊、2012 年 9 月、全 313 頁

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.geocities.jp/takahashifumihiro/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋文博 (TAKAHASHI, Fumihiro)

就実大学・教育学部・教授

研究者番号: 70116474